

# 定年退職後の生活の変化と個のボランティアリズムの形成要因

—「プロダクティブ・エイジング」を可能にするための教育・学習の方向性—

生涯学習研究所 齊藤 ゆか

## I. はじめに

近年、日本の雇用慣行制度が変化する中で、年金支給年齢の引き上げによって、政府は企業の定年年齢の引き上げや雇用継続を促進する方向で政策展開を図っている。一方で、不況の深刻化の中で、企業は、競争力強化、人件費コストの削減を追求する雇用管理戦略の転換によって早期退職への働きかけをいっそう促進している。世紀転換点の労働市場の只中で、雇用労働者の定年の迎え方<sup>1)</sup>には各々の事情により異なっている。

定年年齢(仕事や家事からリタイア)を60歳とすれば、残りの20年は約18万時間、生理的生活時間を除いても5万時間は余暇時間がある。このように多くの時間を、積極的に意味づけたいという人間的欲求が生じてきている。

戦後生まれの人口規模が大きい団塊の世代(1947~1949年)は、2007年以降、定年退職を迎え、社会に大きな影響を及ぼすことが予見されている。この点については、労働経済学を中心に、60歳以降の雇用継続や雇用延長等、雇用政策が論議されてきた。しかし、特に高齢期の「働くこと(Productive Activities)」は、市場における有償労働(ペイド・ワーク)のみならず、非市場における無償労働(アンペイド・ワーク)を含め、包括的に労働を捉える視点が重要であろう。前田(2004)は、NPOのようなボランティア活動や社会的起業など、雇用労働以外のオルタナティブなキャリアを社会の重要な労働と位置づけ、高齢者の多様な働き方を論及した。しかし、その主眼は、男性定年退職者であり、女性については念頭におかれていない。

筆者は、これまで、福祉社会が必要とする人間の労働・諸活動を、ボランティア活動をする主体の側から直視し、人間の労働・活動とは何かを、人の一生のスパンで問い、特にボランティア活動が人間の成長にとって持つ意味を明らかにしてきた。国連は、既に2001年を「ボランティア国際年(International Year of Volunteers=IYV)」と定めていたので、筆者はその前後の国際的動向を把握し、欧米の先行

研究の水準を確認して、自らの研究枠組みを設定した。それが、一生を通じて活動的で、発展する主体的人間の加齢の可能性を追求する「プロダクティブ・エイジング(Productive Aging)」という枠組みである(齊藤2004b:4-12)。

そこで、本稿は、上記研究の継続として、主体的にボランティア活動を担う「定年退職」をした男女個人に視点をあて、定年前後の生活の変化や、各々がボランティア活動を取り組むようになった誘因(動機と意欲)、実施に至るまでの経過、活動内容や特徴等から、個のボランティアリズム(Volunteerism)<sup>2)</sup>を形成する要因を導き出し、生涯学習社会における「プロダクティブ・エイジング」を可能にする「教育」や「学習」のあり方を展望する。

## II. 調査協力者と調査概要・研究枠組み

### 1. 調査協力者の特性

調査協力者は、年齢的に「定年」前後の男性と女性、及び現役男女雇用労働者を対象にしている。しかし、21世紀の今日の時点で日本の「定年」を問題にすると、1990年代以降、雇用の流動化、雇用形態の多様化によって、男性基幹労働力に採用されてきた「定年」制度の将来は継続が危ぶまれている。したがって、「定年」に関する本調査はこうした限時的過程の最終段階で行なわれたかもしれないことを念頭に置く必要がある。また、多くの場合、この男性中心の「定年」制度適用外に長い間おかれてきたも同然の女性労働者にとっては、1986年「男女雇用機会均等法」が施行されて差別定年制は禁止されたとはいえ、さまざまな条件を整えながら、並々ならぬ努力の中で「定年」まで働き続けてきたということに思いを致す必要がある。

そのため、「定年」を待たずに労働市場から自ら身を引いて、「起業」したり、可能な条件の元では「自営業」に従事したりという人々も調査協力者の中に加わる結果となった。さらに、無業の配偶者(主に女性・妻)も加わることになるが、本調査ではあえてそれを排除していない。

## 2. 調査概要と研究枠組み

ここで、調査概要を述べておきたい。質問紙の調査名は「定年退職者の活動に関する調査」で、調査期間は、2002年8月～2003年7月の1年間である。調査方法は、質的調査法によっている。すなわち、インタビュー調査、質問紙調査による自由記述法である。これらの組み合わせ分析をおこなった。調査協力者は、定年退職後に主体的にボランティア活動を行っている個人(男女)である。個人の選定条件は、すべて「理論的サンプリング」(Glaser, Strauss 1967=後藤他訳 1996: 67)に基づき、スノーボール式サンプリング法及びコンビニエンス・サンプリング法(Padgett 1998)の組み合わせによっておこなった。

調査協力者(個人<sup>3)</sup>)の選定条件は、次の3点とした。すなわち、第1に、過去に常勤で資本-賃労働関係に身をおき、定年退職(リタイア)した男女、第2に、現在、主体的にボランティア活動及び社会的活動を行っている中高年男女、第3に、調査者が直接インタビュー調査等に出向ける移動可能な範囲内であること、である。調査協力者は、男性118人、女性66人、計184人である。

上記の研究目的及び調査条件にあう個人を選定するため、筆者は可能な限りの事前の情報収集をおこなった<sup>4)</sup>。同時に、インターネット検索や著書や新聞等からも情報を得た。そこで得た情報すべてを加味した上で、対象を選定し、筆者の調査目的に理解を示した個人及び組織の会員に対して調査票を依頼した。中には、個人的に依頼したものもある。調査票は、基本的には筆者が作成したが、組織によっては調査内容に関する議論を直接及びメールによって重ね、調査用紙に訂正を加えたものもある。この場合、協力者の参加型調査である。このような段階を経て、調査票の配布及び郵送を行い、留め置き・自記のあと回収した。同時にインタビュー調査も進めた。

調査協力者の平均年齢は、男性67歳、女性66歳である。最終定年退職平均年齢は、男性は62歳、女性は60歳であり、退職してから5年以上経過するものが多く見られた。男性の2人のうち1人は、2回以上の定年退職を経験している<sup>5)</sup>。

## III. 定年退職者の生活の変化の特徴

企業の100%近くが60歳定年制を定めているとはいえ、個々の職場・家庭・地域の環境条件により定年退職の迎え方はそれぞれ異なる。とりわけ、男女の差異は一般に大きいといわれる。本節では、「定年退職」という一つのライフイベント前後に、個人男女別の生活(心身の変化や家族、地域、交友とのかかわり、生活時間)にどのような変化が

生じたか、調査協力者の記述内容から明らかにし、雇用者にとって定年のもつ質的意味を把握する。

調査協力者の「定年退職前後」の心身の変化は表1に、生活時間の変化は表2に、家族関係の変化は表3に、地域とのかかわりは表4に、交友関係は表5のようにまとめられる。

### 1. 調査協力者の「定年退職前」の生活

本節では、「定年退職前後」の心身、生活時間、家族関係、地域とのかかわり、交友関係の記述から、調査協力者の男女別による「定年退職前」の生活を明らかにする。

#### (1) 男性の「定年退職前」の生活

まず、男性の「定年退職前」の生活に注目する。男性の8割は、現職時代(定年前)の生活について「仕事」中心であった、と評している。自らを「仕事人間」と称し、仕事一本に専念、全力投球していた。生活のすべては「業務のことで頭がいっぱい」で、精神的には「いつも張り詰めていた」し、「心にゆとりはなかった」という。この生活を喩えると、HE氏は「高度1000メートル、自足1000キロ、飛行機」であったという。大企業の組織の中の「歯車」となることで、仕事人としての「安心感」を保ち、また「子どものため」「家族のため」に働かなければならない義務感、責任感を強固にもっていた男性は少なくない。

生活時間については、「同じパターンの生活」で「規則正しかった」とするものが大半であった。リズムをもった生活を営み、「時計の針の如し」と自嘲するものもいた。しかし、「長距離通勤」、長時間労働による「深夜の帰宅」によって、「休日は休息のため」となる。

このような職業生活から、男性の7割は「家庭」については「妻任せ」であったとする。「育児も家事も妻に任せっきり」で、「毎日飲み歩く」「『午前様』の多い不良亭主」「家庭内の会話が少なかった」。しかし、「稼ぎ手」「大黒柱」として、家庭内では尊敬を保ち、「私がいるときは家に緊張感があった」という。また、「地域」とのかかわりは、男性の調査協力者の大半が「ノータッチ」といい、「ほとんど家内に任せ」であったという。「地域」活動に取り組んでいた数人は、「町内会の役員」程度であった。その為か、交友関係も大半が「社内人間が主」「会社中心」となる。「学生時代」の友人とは、たまに交流する程度であった。

もちろん、調査協力者の中には「定年退職」に対して「人生の区切り」と冷静に受け止め、「不安はなかった」とするもの、企業組織の中で「苦痛」「拘束」から「解放される気持ち」「新しい人生を再び送るぞ!」と、定年後の生活を

表1 調査協力者の「定年退職前後」の心身の変化

	定年退職前	定年退職後	
男性	時間	「高度1000メートル、時速1000キロ、飛行機」「戦争の如し」「いつも張り詰めていた」「心にゆとりがなかった」	「時速10キロ、自転車の世界」「毎日日曜日」「時間にゆとり」「余裕ができた」
	精神的、仕事	「仕事人間」「会社人間」「会社のことのみ」「仕事一点張り」「仕事一本やり」「仕事一筋」「仕事に没頭」「仕事に専念」「仕事中心」「仕事に追われ」「勤務一辺倒」「滅私奉公」「全力投球」「殆ど休みを取らず働き」「仕事中心」「会社以外に関心がない」「会社業務優先」「業務のことで頭いっぱい」「家族を犠牲」「家族のこと、特に子どものことが常に頭にあり、何事も仕事」「子どものために働かなければ」「利益追求」	「物事の判断が幅広くなった」「気分は爽快」「心うきうき」「自分自身を取り戻した」「気持ちを切り替えて」「会社の束縛から解放」「人間生活充実」「肩の荷が下りた」「時間の使い方に慣れてきた」「自由とはこんなにすばらしいもの」「人生の楽しさを追求」「ゆとりの活用」
	組織	「大手企業の懐の中で守られ」「企業内の歯車の一部」「組織の一員としての安心感」	「家庭(特に妻と)の関係性が重要」
	悲観	「定職が離れる不安」「定年後の生活が不安」「暇で苦痛になるのではと心配」	「何もすることがなく空しい気持ち」「現役を離れて協役的存在になる、寂しさを感じる」「解放感の気持ちさがさびしくなる」「色々やりたいと思っていたが、気力、体力不足」「大きな解放感、半年後には居心地が悪くなる」「体力の弱さを感じている」「自由だけ貧乏だ」
	人生との向き合い	「人生の区切り」「不安はなかった」	「自分の生活設計と時間の有効な使い方を考える」「今後の生き方を考えさせられた、健康、収入、老後の生きがい」「これからやりたいことができる期待感でいっぱいだったが、期待しすぎたよう」
チャレンジ	「企業組織の中で苦痛」「拘束から解放される気持ちが強まる」「もうすぐ定年だ！新しい人生を再び送るぞ！健康であれば何とでもなる」	「迷わず飛び込んだボランティア活動で全く心配なく新しい世界に入れた」「まだ仕事ができる」「今までやったことのない新しいことをやってみよう」「地域のため、地球のために人生を過ごそう」「社会への貢献を考えようになった」「人生を最大限に楽しむようになった」「自分のペースで余暇を有意義に活用」	
女性	時間精神	「業務多忙な毎日」「神経がぎりぎり」「仕事と時間に追われ、体中が痛み、胸が痛い」「緊張の連続」「職場でストレス」「時間の制約」「仕事中心」「追われるような日々」「歯を食いしばった」「つっぱしってきてゆとりがなかった」「せかせか」「緊張の中」「疲労が常態化」「はりつめて」「全力で走ろう」「心身ともに多忙」「余裕はない」	「時間に縛られない」「時間が自由」「本当に楽」「生活をエンジョイ」「時間の圧力」「のんびりしたい」「あわてることはない。いつ死んでもよい」「ゆとりある生活」「草花を育てる余裕がある」「解放された」「肩書きがなくほっとした」「24時間を自分の意志で使うことができる」「気分が楽」
	仕事	「仕事一番」「仕事が生きている」	
	チャレンジ	「何か新しいことに挑戦したかった」「自由にやりたいことができるかな」「期待」「何か生きがいをみつけたい」	「元気になり本来の自分に」「自分の持っている力を生かせる」
	悲観		「毎日が豊かな気持ち」「話し場がなく空しい気分、発表の機会があっても何のために？と考えるとやる気がなくなる」「気分的にゆったりはしたが、義母と同居だったので顔をあわせることが多く、気が詰まった、知的障害の義弟が帰ってきて大変なストレス」

表2 調査協力者の「定年退職前後」の生活時間の変化

	定年退職前	定年退職後
男性	「同じパターンの生活」「規則正しかった」「規則的なリズム」「時計の針の如し」「定時に出て定時に帰宅」「夜遅く帰宅」「多忙で時間が欲しかった」「不規則な生活習慣」「勤務時間に合わせて起床と睡眠」「一日の殆どが通勤と会社勤務時間」「長距離通勤」「自由に時間がもてなかった」「休日は休息のため」	「のんびり」「ゆとりができた」「気ままに過ごす」「起床時間が遅くなった」「夜の付き合いがなくなった」「ボランティア、趣味も多忙」「個別の勉強と新たな仕事」「今日は何をしようか考える日々」「一日一回は外出を心がけている」「考えて行動する時間が多くなる」「サンデー毎日で、自由時間は大幅に増えた」
		「時間の使い方が下手になった」「目的がなく時間の無駄が多い」「余裕時間がありすぎ」「自由な時間が多く当初は精神的にまいっていた、慣れてくるとうまく生活できる」「定年になったら、やりたいとおもっていたことも実際には思うようにできない」「家に一日中いる時間が長く体調を崩しかねない、何もすることがない苦痛がわかり、何か暇つぶしをしなければ」
女性	「緊張と母親の身を守ること」「起床5:00義母の一日の食事とおやつ、出勤6:00、通勤時間2時間」「時間に追われ」「寝る時間もないほど」「長時間労働でゆとりがない」「ほとんど会社生活」「時間の余裕がない」「仕事・家事で睡眠時間4時間」「自分自身の時間はなかった」「帰宅は遅く」「ゆとり全く無し」「メリハリがあった」「長年のリズムがあった」「毎日々刻忙しかった」	「朝も遅くなり、夜も遅い」「自由に昼夜の区別なく、寝たり起きたり、散歩したり」「自然を身近に感じる」「趣味のために大半を使い」「ゆっくりできる」「年をとってゆっくりになった、動作、頭の回転にあわせて時間が費やされている」「ゆとりができた」
		「好きなことに好きなように時間がとれる」「趣味や家事に時間がかけられる」「朝の時間がゆっくりにもてるようになる」「起きたい時に起き、夜はオペラ、コンサート、演劇と観たいもの、聴きたいものを心のままに遊んで暮らしている」「友人の見舞い、葬儀の出席ができるようになった」
		「夫の病気など予期せぬことが起こった」「退職後、義理姉が発病、介護の日々」

表3 調査協力者の「定年退職前後」の家族関係

		定年退職前	定年退職後
男性	家族関係	「会社に行ってくるということで特に変化無し」「楽しい時代」「家族との外出は週末」「単身赴任」「家庭のことは家内に任せ」「育児も家事も妻に任せっきり」「家事育児を一切妻に任せっぱなし」「午前様の多い不良亭主」「妻に任せていた」「妻任せ」「家庭のことはやっていた」「家族のことは関与できなかった」「夕食定時帰宅することなく飲み歩く」「会話する時間が少なかった」「順調」「稼ぎ手、大黒柱」「同居の両親叔母、妹は、主に妻が担い、あまり協力できなかった」「妻は家事に専念」「私がいるときは家に緊張感があった」「家庭内の会話少なく」「妻は妻、夫は夫の交友」「円満」	「夫婦二人で孫たちが来るのを楽しみにしている」「孫の成長が楽しみ」「何かにつけ邪魔者扱い」「私生活優先、妻を敬愛」「家の仕事をよく手伝うようになる」「家内がパートに出やすいよう家事の一部を分担」「妻の家事に如何に多くの無駄があることがわかった」「妻に対してうろさくなくなった」「実親との生活が始まる」「親の介護に十分当てられる」「定年後の7年間に5人の親族が死去、妻と共に介護、見取ることができた」「夫婦で旅行に行くように努めている」「家内と一緒の時間が多くなった」「妻と二人だけの生活」「小生の退職と同時に妻も台所定年を主張、小生が台所担当となった」
	配偶者との関係性		「妻といつも家にいるので大変」「妻もあまり出かけないので不満」「妻が体調が悪く外出がない」「家内は煩わしいと思っている」「妻の外出が多くなった」「ギスギスしたものになっている」「退職前は崩壊寸前であったが、現在はすこしなおしつつある」「妻ペースの生活があり」「粗大ゴミとなる」
	一人		「妻が死別し孤独な暮らし」「一人でさびしいこともあるが、弟がよく来る」
女性	家族関係	「必要ときにしか会わない」「年老いた母親の世話」「義母介護、孫の面倒」「家族に甘えていた」「家族は全面的に協力」「多忙で家族と付き合わない」「ときにギスギス」「義父母の病氣、実家の両親の病氣」「夫の協力」「日常の食事など家事は義理姉に依頼」「孫の世話」	「会う回数が多くなるとお互い我慢が出て難しい」「お互いに自立して」「あまり変わらない」「母が高齢になった」「ご飯と一緒に食べられる」「身内の病氣の食事・世話ができた」「甥や姪とのんびり遊べるようになった」「会話が増えた」
	変化無し		「一人暮らしで変わらない」「変化無し」

表4 調査協力者の「定年退職前後」の地域とのかかわり

		定年退職前	定年退職後
男性		「ほとんど家内に任せ」「妻に任せ」「全くノータッチ」「なし」「地域とは町の役員をするだけ」	「定年後の人の会に顔を出している」「趣味の会に入会」「地域活動に協力」「新しく開拓」「町内活動に時折参加」「自治会役員を引き受ける」「積極的に関わるようになる」「クラブに入会」「子育てグループの学習活動に参加」「ボランティア活動を活発に行うようになった」「町内自治会の役員」「民生委員となる」「民生委員、介護相談、ボランティア活動」
女性		「全然なかった」「ほとんどなかった」「挨拶をする程度」「お付き合いする程度」	「役員など引き受けてもよいかという気分」「時間がある限りなんでもこなす、雑談をする時間あり」「地域との付き合いが濃くなる」「地域の交友関係もできた」「団地のお世話係を引き受けた」「近所の方と会話する時間が増えた」

表5 調査協力者の「定年退職前後」の交友関係

		定年退職前	定年退職後
男性		「会社の友人」「社内の人間が主」「仕事関係の人々との交友」「職務関係の人と交流」「会社中心の仲間」「学生時代」	「異業種交流勉強会の古い友人と勉強会」「異業種の会で交友関係が広がった」「ボランティア関係の友人が増えた」「卓球クラブに所属」「民謡の仲間、山の仲間」「スポーツ仲間」「会社以外の人が多い」「趣味の会の友人」「趣味関係の人達との時間が増えた」「地域の人々」「学校時代の友人」「ボランティアを通じた新しい友人」「小中高大の同窓会」「旧友」「故郷での中高同級生との機会が多くなる」「新しい交友」「職場のOB」「元の社と付き合いは極力しないようにしている」
女性		「会社関係の友人とのつきあい」「保育園、学童クラブ時代の親との交友」「仕事や活動関係の付き合い」「組合関係者」「職場での友人」	「会社関係の人とは徐々に離れていった」「学生時代や幼馴染との付き合いに時間をとる」「新しいジャンルの友人」「職場での友人」「会社の人たちとは距離が出た、旧友や地域の人、趣味の友人」「新しい趣味の友人」

肯定的に捉えようとするものもいた。しかし、肯定的な回答を述べるものは、3割に過ぎず、決して多い数字とはいえない。

このように定年退職前の男性は、「仕事人間」として戦後の高度経済成長期の中心となる立役者の役割を果たし、「家庭」「地域」を省みたり、関心を示したりする余裕はなかった。何故なら、長時間労働や長距離通勤によって「家庭」

や「地域」にコミットメントする時間が絶対的に少なかったからである。「家庭」や「地域」との関係は、妻に任せられ、戦後の典型的な「性別役割分業」で成り立つ家庭生活を送っていた。

(2) 女性の「定年退職前」の生活

次に、女性の「定年退職前」の生活について述べる。こ

こで断っておかなければならないのは、女性の調査協力者の6割は、配偶者を持たない「一人暮らし」である。

女性の場合、男性と異なっていたのは、「仕事を生きがい」とするものよりは、定年退職前について、「神経がぎりぎり」「緊張の連続」「はりつめていた」「余裕はない」「疲労が常態化」「体中が痛み、胸が痛い」と、精神的な「ストレス」について訴えるものが多かった。如何に人間関係に神経をすり減らす職場環境であっても、定年まで「歯を食いしばった」「全力で走ろう」という、記述内容から頑な意志を読み取ることができる。このように「追われるような日々」の生活時間とは、具体的に、「起床5：00、義母の1日の食事とおやつ、出勤6：00、通勤時間2時間」(RA氏)、「仕事・家事で睡眠時間4時間」(PL氏)と、「毎日分刻み」で生活し、「自分自身の時間」を取ることは難しかった生活を指す。

家族関係においては、男性にはみられなかった義母や両親の「病気」や「介護」、孫の「世話」など、職場での労働に加え、家庭内労働に駆使する女性もいた。一方で、家事労働を、「夫」「義理の姉」「姉妹」などの協力を得て生活するものもいた。「地域とのかかわり」や「交友関係」については、男性とほぼ同様の特徴であった。すなわち、多くは、地域とは「ほとんど関わっていない」「挨拶をする程度」、「交友関係」は仕事先の友人との付き合いが大半であった。しかし、中には「保育園、学童クラブ時代の親との交友」を育むものもいた。

このように仕事をもった女性は、「定年退職前」に、男性以上に精神的なストレスを抱えて生活を営んでいた様子が記述内容から受け取れる。また、家庭生活については、子育ては一段落したとはいえ、老親の介護や孫の世話なども加わり、男性の記述にはなかった家庭内労働により、生活時間は常に圧迫状態にあったことが推測される。地域や交友関係については、男性とほぼ一致していた。

## 2. 男女別による「定年退職後」の生活

次に、調査協力者の記述内容から、個々の「定年退職後」の生活を検討する。

### (1) 男性の「定年退職後」の生活

男性の場合、「定年退職後」の生活について「サンデー毎日で、自由時間が大幅に増えた」という。規則正しい生活とは一転し、「起床時間が遅くなる」ケースが多い。生活は、「時速10キロ、自転車の世界」となる。

「定年退職」というライフイベントを経験することにより、男性のおよそ2割は、改めて「自分の生活設計と時間

の有効な使い方を考える」「今後の生き方を考えさせられた」とする。「夜の付き合い」もなくなり、「今日は何をしようかと考える日々」。「会社からの束縛から解放」され、「自分自身を取り戻し」、「気分は爽快」である。「心うきうき」、「自由とはこんなにすばらしいもの」と、定年退職を肯定的に捉え、「人生の楽しさを追求」し始める。2割は、「地域のため、地球のために人生を過ごそう」「社会への貢献」と決意し、フィールドを「仕事」から「地域」に役割をうまく移行させている。「迷わず飛び込んだボランティア活動で全く心配なく新しい生活に入れた」「人生を最大限に楽しむようになった」「自分のペースで余暇を有意義に活用」できるようになった、と「人間生活を充実」させていると言う。

しかし、一方で「何もすることがなく空しい気持ち」「現役を離れて脇役的存在となる」「解放感の気持ちさがさびしくなる」「体力の弱さを感じている」「半年後には居心地が悪くなる」とするものも2割はいる。また、男性の半数は、「時間の使い方が下手になった」「目的がなく、無駄が多い」「家に1日中いる時間が長く、体調を崩しかねない。何もすることがない苦痛が分かり、何か暇つぶしをしなければ」と、焦燥に駆られる。こう述べるものの多くは、民間の管理職、官公庁所長など、高いポストに就いていたものであった。

民間の技術研究職であったNK氏(男性、現在63歳)は、「定年の迎え方」について、次のように述べている。(下線は著者)

定年は人によってその迎え方が違います。退職金を受け取った時点で、何もしない人もいますし、何か落ち着かない様子で仕事を求めて右往左往する人もいます。又趣味だけを追いつづける人もいます。60歳で定年を迎えた人で年金を支給されているにも関わらず、何か忙しくしていないと世間体も悪いし、自分としても落ち着かない人もいます。この年になると子どもは独立している人が殆どですから、夫婦二人が大半です。ところが男としては、毎日かばんを下げて、ぎゅうぎゅう詰めの電車で職場に通っていたのが、ある日突然必要無くなったわけですから、それこそ何をやったらよいか途方にくれるわけです。

(中略)

私の友人で体も頑強で、仕事、仕事に明け暮れていた人が、定年になった後、みるみる往年の元気をなくし、老けていきましたが、その彼がその後、彼の人生で初めてという大病を患った後、つき物が落ちたように朗らかに変わり元気を取り戻したのが印象的でした。きっと彼は昔からの強い社会の束縛から解放されたと感じたのでしょう。

このように、現役時代にばりばりと仕事をこなし、現在の経済大国を作り上げてきた人達がその緊張を捨てきれ

ないまま定年を迎えているのが、実態のような気がします。生き様が不器用というのもこの年代の特徴ではないでしょうか。

(中略)

従って、今回のような調査は残酷な感じを持ちますし、場合によっては繕った書き方をするかもしれません。定年を迎えた男の心境は実に複雑だと思うからです。私もこの点で頓着しないといたいところですが、こだわります。

よく、現役時代に付き合っていた友人宅に平日電話すると、いつも留守か、奥さんが電話口に出て、主人は仕事に出ていて帰宅は夜遅くなりますと言われます。殆どの人が同じような事を言われます。60歳を半ばまできた人達が本当に現役時代のように仕事、仕事に追われているのでしょうか。そのために、私のような歳になると、連絡は夜か休日に行くことが、暗黙の了解事項になっています。いつまでも忙しくしているのが、世間体もいいし、そのように他人に思わせておくのが一番であるという見栄が見え隠れします。なぜこれほどまでに世間体を気にしなくてはならないのでしょうか。

NK氏が述べるように、仕事人間であったものが「定年退職」する心境は複雑である。長年定職を持っていたものは、「定年退職後」に生活を切り替え、肩書きを持たない一個人の存在として対峙し、「家人」「地域人」として生きる道を見出すことは容易なことでないことが推測できる。

次に家族関係に注目すると、現職時代とは異なったものとなる。現職時代は、「妻任せ」であった家庭内労働も、家事の一部を分担している、とするものもいる。例えば、YI氏は、「小生の退職と同時に、妻も台所定年を主張、小生が台所担当となった」とする。また、「孫が来るのを楽しみにしている」「孫の成長を楽しみ」と述べるものもいる。一方で、「実親との生活が始まる」「親の介護」に時間を当てる、老親との付き合いが課題として持ち上がっている。TA氏は、「定年後の7年間に5人の親族が死去、妻とともに介護、見取ることができた」と言う。

「定年退職」した男性の大多数は、家族関係について、妻との共有時間に関して記述している。現職時代の家庭生活における過ごし方を取り戻すかのように、「妻を敬愛」「夫婦で旅行に行くようになった」と述べるものもいた。しかし、男性回答者のおよそ半数は、妻との関係性を切実なものとして受け止めている。NK氏は、妻との関係性について続けてこう述べている。

妻としては、夫を送り出した後の自由時間が、夫の定年と同時に失われるわけですから、夫の定年は妻の唯一の安息時間を奪い去ることになります。そういう

女房の気持ちを察してか、何とか職を求めて必死になって活動したが、見つからないために、そこで挫折したり、はたまた貴重な退職金を慣れない事業に投資して失敗したりと、定年後の男の行動を見ていると一つ一つが小説として書けます。女性の目から見ると、なんともいじましく写る男の現実です。

男性のうちの何人かは、家庭生活には「妻の生活ペースがあり」、「妻といつも家にいるので大変」と感じている。「妻の家事に如何に多くの無駄があることがわかった」というもの、「妻に対してうるさくなった」というものもいる。これは、在職中は仕事中心に目が向けられていた男性が、家事の一部を分担するようになったことで、今まで気づかなかった発見をしたり、職場での上下関係を家庭内に持ち込んだりすることによって起こるケースが推測される。また、「家内は煩わしいと思っている」、「妻の外出が多くなった」「ギスギスしたものになっている」とするものもいる。なかには、「妻が体調を崩し」、あるいは「妻が退職前に死別」したとするものもいる。男性の多くは「定年退職」というライフイベントによって、否応なしに配偶者の向き合いが必要となってくる。

「地域とのかかわり」は、「趣味の会に入会する」「地域のクラブに入会」「町内自治会の役員となる」「ボランティア活動に参加」など、徐々に「新しく開拓」され、「交友関係」も趣味を中心として徐々に広がる。職場関係の人との付き合いは、「定年退職」と共に一定の距離ができ、交友は「新しいジャンル」の繋がりがあがる。また、中高大の旧友との交友機会も多くなる。このような、「地域」や自分の「趣味」や「特技」を中心とした人との付き合いが広がるにつれ、「仕事人」の顔から「地域人」「家人」の顔へと、徐々に移行していくようである。

## (2) 女性の「定年退職後」の生活

女性の場合の「定年退職後」は、男性とは異なるものであった。「定年退職後」は、時間に縛られない「自由」「楽」「ゆとり」「解放的」「気まま」「のんびり」な生活となる。「定年退職後」の生活について、肯定的に捉える女性は多い。「24時間を自分の意志で使うことができる」「好きなことに好きなように時間が取れる」「自由に昼夜の区別なく、寝たり起きたり、散歩したり」する。今まで目を向けられなかった「草花を育てる余裕」もでき、「趣味のために大半を使い」、「夜はオペラ、コンサート、演劇と観たいものを、聴きたいものを心のままに遊んで暮らしている」。「元氣になり本来の自分」を取り戻し、「毎日が豊かな気持ち」とな

ったと述べている。男性に比べ、女性の多くは、余暇時間をもてあますことなく自然に過ごす。

在職中殆ど関わりのなかった地域においても「付き合いが濃くなる」「会話をする時間が増えた」「交友関係も増えた」とする。交友関係は、男性と同様に、仕事関係の人とは距離ができ、「新しい趣味の友人」「新しいジャンルの友人」との交流が深まり、「学生時代や幼馴染との付き合いの時間」も取れるようになった。

家庭生活について、配偶者との関係について言及するものではなく、「変化無し」とするものが最も多い。しかし、ST氏は、「気分的にゆったりはしたが、義母と同居だったので顔を合わせる事が多く、気がつまった。知的障害の義弟が帰ってきて大変なストレスを抱えたとし、またWT氏は、「夫の病気など予期せぬことが起こった」、「在職中家事を担っていた義理姉が発病、介護の日々」となったとする。このように、調査協力者の数名の女性は、在職中の有償労働から、身内の「病気」や「介護」などの無償労働へと転換する現実もあった。しかし、働きつづけていた女性の大半は、在職中から仕事以外のプロダクティブな活動に関わっていたことに特徴がある。AO氏が「年をとってゆっくりになった。「動作、頭の回転にあわせて時間が費やされている」というように、もちろん、年齢に応じて個々の生活ペースは異なっている。

### 3. 定年前後の生活の変化

以上の記述内容から総括すると、激動の時期を経験し、長期間にわたり過ごしてきた個々人の「仕事」と「家庭」との往復を中心とした生活歴、すなわち、ライフスタイルの継続的な積み重ねは、個人の家族・親族関係、交友関係、地域関係、さらには個人の心身に大きな影響を与えていることが、明らかとなった。

「定年退職前」と「定年退職後」の個(心身)を中心とした「家族・親族」「仕事」「地域」「交友関係」関わりを示したのが図1である。

図1を簡略的に説明すると、「定年退職前」において大多数は、「仕事」を中心とした生活と、労働再生産としての「家庭」、また、「仕事」との関わりでの「交友関係」が主であったことをいう。「定年退職後」になると、生活時間は否応なしに激変はするものの、「家族」、「地域」、「交友」とのかかわり方はすぐに変化するわけではない。第1段階として、「仕事」の肩書きを持たない「個」との向き合い、第2段階として、自分の家族、配偶者との関係性の再構築、第3段階として、内発的に自己を生かしたい、余暇を有意義に過ごしたい、新しいことをやってみたい、地域のため、地球の

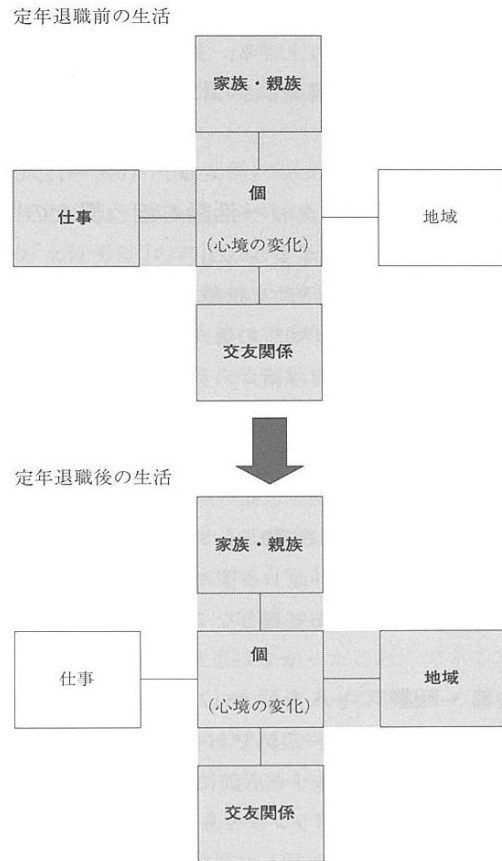


図1 定年前後の生活(心境の変化、家族の変化、地域との関わり、交友関係、生活時間)

ために人生を過ごしたい、貢献したい、という内発的・外発的動機に揺り動かされ、「地域」とのかかわりを徐々に持つようになる。また、プロダクティブ・アクティビティにも取り組むようになる。第4段階として、第3段階の「仕事」や「家庭」以外の活動の結果、新しい「交友関係」を徐々に築き、旧友とも親しくなる。もちろん、調査協力者の中には、第1段階から第4段階までの経過をたどらなくとも、「定年退職前」から、「家庭・親戚」「仕事」「地域」「交友」関係性をバランスよく保つものもいた。

各々が、定年退職後におかれた社会、家庭、地域、及び文化の中で、①個々人がどのような生活時間・習慣で過ごしてきたか、これから過ごしていくのか。②どのようなライフスタイルを選択してきたか、これから選択するのか。③主体的に社会や地域との関わりを維持、開発してきたか、これから開発するのか。これらすべての要因が、「プロダクティブ・エイジング」への可能性となり得るものと考えられる。その為には、個々人が、「定年退職」前後に、オルタナティブな生活へとソフトランディングできるような生活、あるいはそうした活動、さらにはそれを促進する教育

や支援などが重要な意味をもつと思われる。

これから、次節で取り上げる、主体的にボランティア活動を担う個々の記述内容からさらに詳細が明確になるであろう。

#### IV. 主体的にボランティア活動を担う男女の「プロダクティブ・エイジング」

次に、ボランティア活動を積極的に行う「定年退職」をした男女20人(男女各10人)<sup>6)</sup>の個人事例を選定した。この20名は、先に述べた第1段階から第4段階を経験したものである。各事例から、上述した調査目的に沿って「プロダクティブ・エイジング」を可能にする要因や条件を抽出した。

本研究の枠組みとなる図2の「バスとカーロのモデル」の事例への応用展開は、「プロダクティブ・エイジング」が創出できる要因を考える基礎となっている。

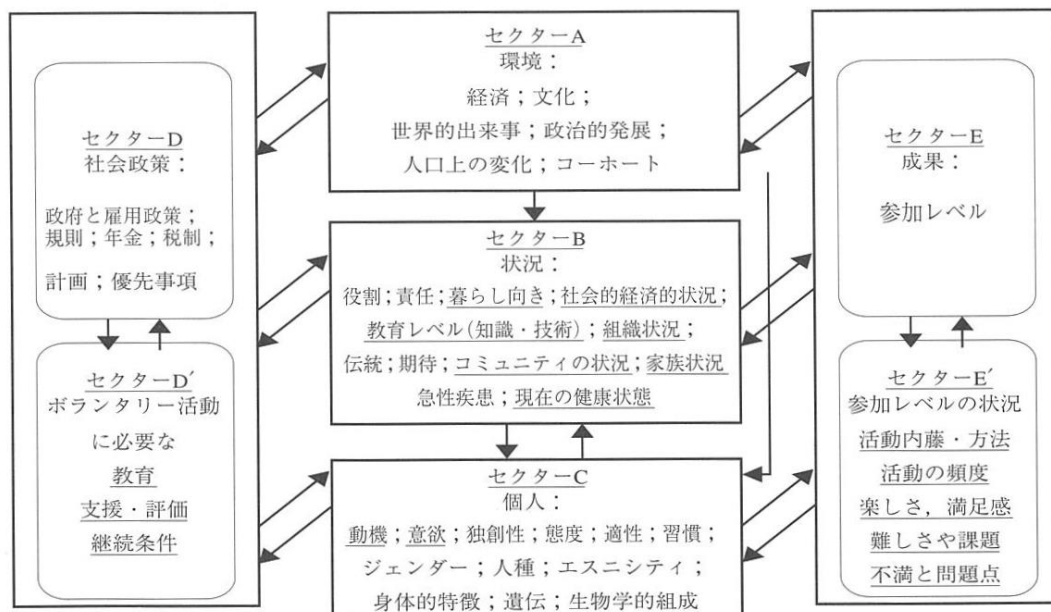
##### 1. 仕事・職業スキルを活かした活動

まず、これまで仕事一辺倒であったYI氏(【事例3】64歳男性)の新たなボランティア活動に目覚めた理由について取り上げる。第1に、ボランティア活動に取り組んでみようという動機は、家族や友人の存在にあったこと。第2に、退職をして体験したボランティア活動が、さらなる地域活動をしてみようという意欲に結びついていること。第3に、大会社で培った成功と自信、存在感や威厳が、リタイア後

のボランティア活動の場にも生かされてもいること。すなわち、YI氏自身の教育レベル、組織力、責任感、社会的経済的状況がすべて高いことがこの場合プラス要因となったこと。第4に、ボランティアな活動経験がさらに人間の幅を広げ、他のリタイアを迎えたものにも勇気を与えていること。それが、YI氏自身の生きがいにもつながり、相互に「プロダクティブ・エイジング」を高めていること、である。

一方、45年間、乳幼児の保育に全力投球してきたTA氏(【事例2】68歳、女性)は、自身の「心身の健康づくり」を重視している。活動条件として、「参加していることが楽しくうれしいこと、人に喜んでもらえることが実感できること」、「創造力が発揮できること」、「よいコミュニケーションがとれること」の3点をあげている。また、「拘束感」のないボランティア活動は、活動を継続させる要因となっている。さらには、TA氏のボランティア活動に対する強いモチベーション、強固な生活ニーズや、現在に至るまでの職業生活を含む生活歴のすべてが結びついているといえる。

国際ボランティアとして活動しているKH氏(【事例9】63歳男性)及びSN氏(【事例13】65歳男性)は、外資系商社の職業スキルを活かした活動を行っている。SN氏は、次の点について「プロダクティブ・エイジング」を生きるヒントを述べている。第1に、万人が「ボランティア活動に取り組む」ことを述べていること。第2に、色々なことに関



注) セクターDに「D'」、セクターEに「E'」を加筆した。成果が逆方向に跳ね返るのではないかとの仮定から、矢印は双方向にした。齊藤(2004:9)の図2プロダクティブ・エイジングの概念モデル(「バスとカーロのモデル」)から加筆箇所は、すべて灰色で記した。尚、下線部分は、筆者の調査の設問項目である。

図2 「バスとカーロのモデル」の、事例への応用展開



心をもって生活していること。第3に、ボランティア活動をするには、生活に必要なあらゆる知識が必要になること。第4に、活動を継続していくには健康が不可欠であるが、たとえ障害を持つ身となっても社会とのつながりを最期まで持ち続けること。第5に、国内のみならず、国際的視点に立って常に物事を広く考えること、と言及している。

## 2. 家事・介護・育児スキルを活かし、友人関係から生まれた高齢者福祉ボランティア活動

福祉NPOに携わるAS氏(【事例6】70歳女性)、RS氏(【事例7】74歳女性)、NI氏(【事例8】69歳女性)の家事・介護・育児スキルを活かした高齢者福祉ボランティア活動をとりあげる。

まず、専業主婦歴の長いAS氏は、第1に、AS氏自身のボランティアに対する強い動機、第2に、「家事」や「介護」のスキルを活かせる場に身をおいていること、第3に、背後から夫の協力を得ていること、第4に、AS氏の考えに賛同する交友関係がネットワークを築き上げていること、に要因がある。

また、看護婦歴、保育園勤務歴をもつRS氏からは、次の4点を抽出した。第1に、RS氏の看護師と保育士との両方のキャリアが、現在の福祉ボランティアに活かされていること。第2に、リタイア後、放送大学などの生涯学習機関で学び、福祉に対する専門性を高めたこと。第3に、同様の課題を共有するAS氏との出会いを通じて、新しいものを作り上げようという意欲に繋がったこと。第4に、RS氏自身、世話好きで、プロダクティブな活動が性に合っていたこと、などである。それに加え、NI氏は、第5に、NI氏を精神的に支える家族の存在が尚、NI氏のプロダクティブな活力を触発している、と考えられる。

## 3. 趣味スキルを活かしたボランティア活動

MW氏(【事例5】76歳男性)の定年前の生活は、次の3点の特徴がある。第1に、在職中から、自分の趣味・特技を見つけ、それを切磋琢磨していたこと、つまり余暇歴が豊富なこと。第2に、リタイアする前から、その後の生活を強く意識していたこと。第3に、自分の趣味スキルを活かして、交友関係や地域関係を拓いていること。第4に、自らの職業内容を客観的にみつめ、規定の定年年齢より早く職場から徹底していること。第5に、MW氏の活動を家族がバックアップしていたこと、等である。これらはいずれも「プロダクティブ・エイジング」に向かう為にも有効なものであった。しかし、「協力体制」「環境」「実施者の把握や認識」が不足している実態もあり、MW氏のいう課題

は他のボランティアにも通じている。

## 4. 教養・学習・研究の延長にあるボランティア活動

MK氏(【事例4】70歳女性)の「プロダクティブ・エイジング」を引き出す要因は、次の4点である。第1に、MK氏自身の「女性労働」の向上に対する強い動機、意欲を永続的に貫き、学習してきたこと。第2に、このような強い思いを職業生活とし、さらには社会的活動及び運動として継続的に研究活動をしてきたこと、またこのような活動が社会にも個人にも求められ、MK氏自身期待され、強い役割意識と責任感・使命感をもっていったこと。第3に、MK氏の職業生活時代は、両親の協力を得た生活を営み、職業労働・社会的活動に没頭できる環境にあったこと。また、両親を看取った後も、親族関係と強い絆で結ばれ、生活が安定していたこと。第4に、年齢と共に、体力の衰えは否めないが、気力・意欲の減退はなかったこと、である。こうした要因は、MK氏をプロダクティブな活動への強い動機や意欲に結びつけたものであると考えられる。

では、プロダクティブな活動を高め、継続していく条件とはどのようなものであろうか。MK氏の記述内容から、3点の条件が特徴づけられた。第1に、活動には「目標を明確化」が不可欠であること。第2に、活動の「前進」「成功」「乗り越え」などの達成感を味わえること、第3に、活動において人々との「出会い」があり、また活動内仲間が相互の「対話」できる環境にあること。第4に、活動を「画一化」や「停滞」させないように、新たな「出会い」や「情報」を取り入れ、活動を質量共に高めていくこと、この繰り返し作業をして活動を高揚させること。第5に、古くからの仲間(高齢世代)から新しい仲間(若い層)へと「活動の引き継ぎ」をスムーズに行えること。第6に、自分の「体力に見合った活動内容」を選別すること、である。こうした活動条件を念頭におくことによって、プロダクティブな活動力をさらに高めることができると考えられる。これは、他の活動者にも共通する条件となり得るものである。

## 5. 家族関係、配偶者関係から生まれたボランティア活動

定年後、夫妻銘々が個別に行動することを決めたTK氏(【事例10】64歳男性)は、次の2点から現在のコミュニティ活動を継続させている。一つは、リタイア前後に二つの経験(旅行での体験、母の介護経験)が、ボランティア活動の契機になっていること。もう一つは、長年接客業をしていた経験が、コミュニティにおける人間関係をうまく保

つことを可能にしていること、である。このように、筆者がインタビュー調査した大半は「夫婦個別行動型」であった。

しかし、夫妻でボランティア活動に取り組むケースとして、OY氏(【事例15】74歳男性)とTY氏(【事例16】75歳女性)夫妻は、次の理由から活動を継続している。第1に、活動内容は、学生時代から継続して教育されてきた能力、しかも夫妻共に最も得意とする分野であったこと。特に、夫はそれを職業時代プロとして活動していたこと。第2に、このような活動を、夫妻相互の関係性において高めていること。活動が、夫妻の共有時間を増やしていること。第3に、妻は家事に負われることなく、自由に活動できる立場にあり、夫もそれを理解していること。第4に、夫の現職時代の高給与が、現在の年金に繁栄し、経済的に豊かな家庭であること。第5に、活動することによって、さらに夫妻個々の自己有用感を高めていること、である。OY氏、TY氏夫妻は、生活を共にし、コミュニティにおける活動をも共有し、共に楽しみ、また共に同じ課題にぶつかる。こうした繰り返しは、「プロダクティブ・エイジング」を高めるものと考えられる。

さらに、短期大学の教師を行っていたSK氏(【事例18】67歳女性)の、プロダクティブ・エイジングに成り得る要因として、次の3点が考えられる。第1に、SK氏は、現職中から地域のボランティア活動に取り組み、現在も継続して行っていること。第2に、国際的活動経験を契機に、夫妻でボランティアを楽しめるものと考えていること。第3に、国際の舞台ばかりでなく、地域においても、SK氏の研究の専門を生かした(職業スキル)ボランティア活動に取り組んでいること、などが挙げられる。

## 6. 地域とのかかわりから生まれた活動

都会育ちのTK氏(【事例3】62歳、男性)の場合、第1に、TK氏自身の暮らし向き、社会的経済状況、教育レベル、コミュニティの状況、家族関係、健康状態、TK氏自身の社会的活動に対する意欲と向上心、すべてにおいて高いレベルにあること。第2に、リタイア前から仕事以外の活動(スイミング、韓国語講座)を始め、リタイア後の生活にソフトランディングしていたこと。第3に、リタイア後、「自治会長」を依頼されたことにより、地域にさらに目を向ける契機となったこと。第4に、TK氏自身の職業上の専門的スキル(パソコン)を生かそうという意欲と希望を持っていること。第5に、TK氏は責任感が強く、「世話役」や「中心的な立場」を自分の役割及び適性として買って出ていること、新しい人との交流も得意で、趣味と通じた仲間が常に

いること、など挙げられる。これらすべてのTK氏の要素は、「プロダクティブ・エイジング」の高いレベルで転化する可能性がある判断される。

一方、一人暮らしをするHH氏(【事例11】66歳男性)は、地域に根ざしたボランティア活動を行う。暮らし向き、社会的経済状況、教育水準、生育歴、家族関係は、標準以上というものではないように受け取られる。しかし、第1に、T市という市民活動を積極的に行うコミュニティの状況。第2に、そこでサポートをしているスタッフの存在。第3に、本人の健康状態が良好という要素が相乗し、コミュニティ環境に対する意識レベルが高くなっている。コミュニティの活動においては、人間関係の難しさや不満もあったが、活動を通じて得られる自分の「役割」や「存在意義」が楽しさ、満足感へと転換し、HH氏なりの独特な「プロダクティブ・エイジング」を見出していた。

## 7. インパクトのある経験と職業スキルを活かしたボランティア活動

官公庁に長年勤務していたMT氏(【事例12】75歳女性)は、戦時中の体験から、職業スキルを活かしたボランティア活動に取り組む。ボランティア活動の条件として、次の提案をしている。

地域に組織を作ることで、参加してみて、生育歴が全く異なる集団のまとまりを作るのは、本当に大変だと思いました。その問題点として、次の3点があります。①話し合いの訓練ができていないので、自己主張が強く、まとまりがつかない点、②自己犠牲を自分の勢力増強の手段にするので、偏ってしまう点、③ボランティアにはルールが必要で反ってしない方がよいことが起きる点、があります。

だから、ボランティア活動は、なるべく目的をはっきりさせて、そのことに情熱が持てる必要があると思います。みていますと、目的に付随して、名誉欲とか、利害関係とかが出て、最初の目的からそれることがあります。よいことも、悪いこともあると思いますので、社会は、第三者の目に関心をもってサポートすべきです。

そのための教育活動として、①目的に対する客観的考察ができること、②自分の考えが最高と思わないこと、③誰の意見でも、予備知識を持たないで聞くこと、④目的がそれないこと、⑤もて区のが定まったら、一番いい方法を考え、土台作りをしっかりとすること、などの5点が必要となります。

私が考える活動の条件は、①無理をしないこと、②目標をはっきりさせること、③あせらないこと、④具体的目標をかかげること、⑤時々原点に戻って考えること、です。ボランティア活動は、やりすぎなければ、

反って目的がある方が健康のためにもよいのです。

上述のように、MT氏は、ボランティア活動の「目的」の重要性を再三強調している。これは、MT氏が在職時代においても最も重視していた点ではないかと考えられる。MT氏の意見、すなわち、ボランティア活動の「問題点」を2点、「活動の上での教育活動の必要」を5点、「活動の条件」を5点のどれかが、筆者がボランティア活動を考えていく上で、示唆を与えてくれるものであった。

同様に、民間で技術指導を行っているMW氏(【事例14】68歳女性)は、国際ボランティア分野における企画、援助、活動参加、事務局補助などに携わる。MW氏が、ボランティア活動に取り組むようになったきっかけは、「戦中・戦後を子ども時代に困難な生活」というインパクトのある経験が、同様の状況にある人を助けたいという信念となっている。このようにMW氏は、幼少の頃の戦時経験がNGO等の活動に結びついているものと考えられる。MW氏は多く国際的な組織に所属しながら、ボランティア活動から多くの点を学んでいる。それは、第1に、活動上には多様な価値観の人がいること。第2に、活動を通じて自分の経験、可能性、仲間を広げていること。第3に、活動を通じて新しいこととの出会いがあること。第4に、自らの精神、思考を高めていること、の4点である。MW氏は、今後高齢化に向け、外出しなくても継続的できるボランティア活動を望んでいた。

一方、国際ボランティア歴40年で、活動そのものが仕事となっているJO氏(【事例19】60歳男性)及びMK氏(【事例20】57歳女性)は、筆者の対象外であるが、若き頃から国際ボランティア活動の先導事例として取り上げる必要があると判断した。

まず、JO氏が、プロダクティブ・アクティビティに取り組む要因として以下6点を考えることができる。第1に、JO氏は幼少の頃ボランティアな活動に目覚めるインパクトのある経験(大病)をしていること。その経験によって、キリスト教精神に目覚め、「人の為に生きる」「愛の為に生きる」というボランティアな活動の動機や意欲に結びつき、世界平和、愛などの夢を信じて責任や役割を持ちつづけていること。第2に、教育レベルが非常に高く、ボランティアな活動に対しても奥深いものをもっていること。教育レベルの高さは周りにも大きな影響力を及ぼし、高度なボランティアな仕事も引き受けていること。第3に、JO氏の暮し向きや経済状況は、資産家でのレベルにあったこと。第4に、家族もJO氏の活動に理解があり、家事・育児・介護などは妻が多くを役割分担してくれたこと。第5に、国

際的なボランティア活動体験を活かした教育力に期待していること。それを紙面や講演会などにおいても積極的に発言していること。第6に、国際的なボランティア活動は、JO氏の生活の糧でも有り、収入に結びついた(コンサルティング的な)ボランティア活動になっていること、である。

また、「定年」を経ないMK氏は、第1に、MK氏の若い時期のボランティア国際なインパクトのある経験の蓄積、第2に、MK氏の好奇心、向上心、強い意志、第3に、配偶者の理解と裏付けられた生活の糧、第4に、健康の維持が、今日に結びついている。しかし、JO氏やMK氏のように、多くの人がこのような要因を兼ね備えているとは限らない。

## 8. 収入に結び付けた国際的なボランティア活動

官公庁で、教育・研究に取り組んできたHK氏(【事例17】65歳男性)のプロダクティブ・エイジングを創出している要因として、次のことが考えられる。第1に、HK氏は、自分の技術や教育・研究に自信を持ち、その技術を開発途上国にボランティアな活動として活かしたいという動機、意欲、態度、役割、責任感を持っていること。第2に、国際的な活動によって、HK自身のボランティア活動をさらに経験を豊かなものにしてしていること。第3に、在職中から配偶者や子ども達と余暇を楽しみ、定年後は台所担当を率先して行うなど、家族状況がよい状態にあること。第4に、20年間ジョギングを継続するなど、HK氏自身の健康管理は継続してよい状態であること、などが挙げられる。現在、HK氏は、国際ボランティア活動で築き上げた人脈で、自営業の国際技術支援というプロダクティブな活動に携わっている。

## V. 「プロダクティブ・エイジング」の可能性とその条件

以上、多様なボランティア活動事例の詳細を追った。ここから共通した「プロダクティブ・エイジング」の可能性とその条件を、図2の「バスとカーロのモデルの事例への応用展開」を念頭におきながら、総括的に考察を加えたい。

### 1. 「バスとカーロのモデルの事例への応用展開」の概念枠組みとの照合

まず、プロダクティブ・アクティビティが可能な要因として、重要と思われる順に記したい。第1に、個人のボランティア活動に対する「動機」と「意欲」(セクターC)が相乗

し、個人の強い「責任感」「役割意識」(セクターB)、ひいては「自己有用感」「存在意義」「使命感」「生きがい」につながるという個人的要因である。これは、例えば「たとえ障害を持つ身となっても社会とのつながりが欲しい」という言及からも分かるように、社会とのつながりをもつということは人間の本質的欲求でもあるといえよう。第2に、個人の経験の度合いである。つまり、これはセクターBの「教育レベル」の知識・技術に間接的に結びつくものであるが、個人の職業経験(職業スキルとキャリア)、生活歴(家事・介護のスキル等)、余暇歴(趣味スキル、旅行経験等)、学習歴、インパクトある経験が重要なものとなる。あるものは、生活上の幅広い関心事、知識・技術、そして専門的知識・技術の必要性を強調している。第3に、「家族」の協力と「家族」間の相互作用である(セクターB)。第4に、コミュニティの状況と、その中に含まれる「仲間」(友人等)の存在である。第5に、個人の「経済的社会的状況」「現在の健康状態」が安定していること。第6に、セクターC(個人)やセクターB(状況)を誘発し、高める「教育」である。つまり、学生時代からのボランティア体験学習や、コミュニティに目を向ける生涯学習の意義は大きいのである。第7に、セクターC(状況)を支援するサポーターの身近な存在である。つまり、セクターDのボランティア活動に必要な支援・評価の存在である。第8に、ボランティア参加経験における「楽しさ、満足感」は、「難しさや課題」「不満と問題点」を上回ることであること。

## 2. 「プロダクティブ・エイジング」を可能にする条件

「プロダクティブ・エイジング」を可能にする条件は、次の10点が考えられる。第1に、仕事、職業スキルを活かしたボランティア活動。第2に、家事、介護、育児労働スキルを活かしたボランティア活動。第3に、趣味スキルを活かしたボランティア活動、趣味の延長にある活動。第4に、「教養」「学習・研究」の延長にあるボランティア活動。第5に、ボランティア・社会的活動体験及び学習を活かしたボランティア活動。第6に、家族関係、及び配偶者関係から生まれたボランティア活動。第7に、地域とのかかわりから生まれたボランティア活動。第8に、友人関係から生まれたボランティア活動。第9に、インパクトのある経験や体験からくるボランティア活動。第10に、収入に結び付けたボランティア活動である。本研究でとり上げた20事例は、図3のように、「プロダクティブ・アクティビティ10誘因」と有機的に結びついているのである。

## VI. ボランティアリズムの形成要因と「プロダクティブ・エイジング」の可能性

### 1. ボランティアリズムの形成要因

以上から、筆者は「プロダクティブ・エイジング」を創造するための結論として、「個のボランティアリズム」の形成を核とし、個々人が「プロダクティブ・アクティビティ」を確実なものにするためのさまざまな誘因の構造があることを導き出した。「個のボランティアリズム」を形成する要

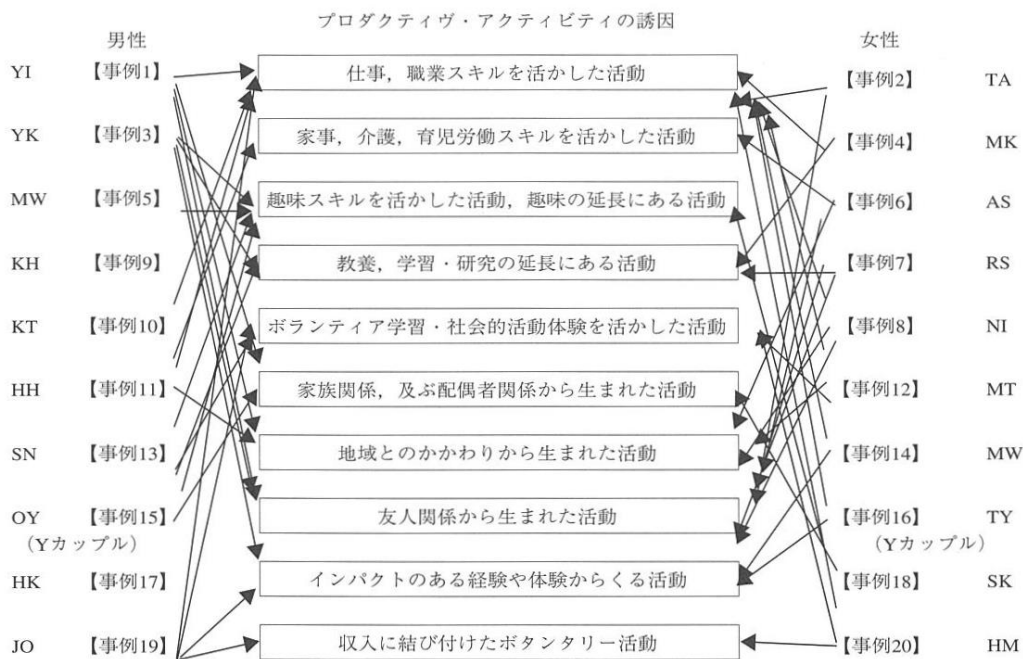


図3 事例から導き出したプロダクティブ・アクティビティへの誘因

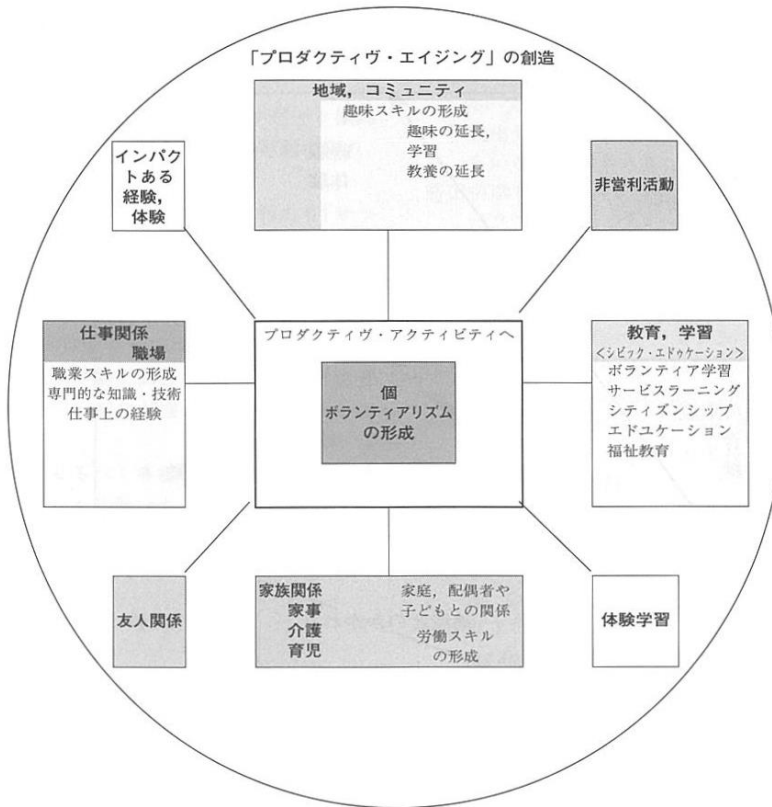


図4 「プロダクティブ・エイジング」を生み出す様々な構造

因を示したものが、図4である。

すなわち、「家族関係」では、配偶者や子との関係、家事・介護・育児労働のスキル形成、「友人関係」、「地域・コミュニティ」では、趣味スキル形成、趣味・学習・教養の延長、「教育・学習」では、シビック・エドケーション、ボランティア学習、サービス・ラーニング等、「体験学習」、「非営利活動」での活動体験、「職場関係」では、職業スキル形成。専門的知識・技術の形成、仕事上の経験、インパクトのある経験や体験、等のすべてが「プロダクティブ・エイジング」を可能にするとの結論に達した。ここで要となるのは、「教育・学習」の役割である。この点について以下述べ、本研究の結論としたい。

## 2. 「プロダクティブ・エイジング」を可能にする「教育」・「学習」の方向性

「プロダクティブ・エイジング」の可能性を生み出す誘因が多岐あるなかで、最も重要な方策はどのようなものがあるであろうか。その方策の一つとして、プロダクティブ・アクティビティを誘発し、個々人のモチベーションや意欲・意識を高める「教育」や「学習」の役割が重要となると考える。

しかし、「教育」や「学習」には様々な種と段階がある。図5に示すように、人間の発達の最も基礎となるのは「家庭教育」である。また、身近な「地域」における体験的な学習、学齢段階における「学校教育(初等・中等・高等教育)」、仕事における「職業教育」「技術訓練」、地域・社会で自ら育む「趣味的・教養的学習活動」等、がある。これらは総じて「生涯学習」なのである。つまり、生涯学習社会における、個々人の実体験が意識的・合目的に育まれる教育や体験の積み重ねが、「プロダクティブ・エイジング」を方向付けるもの、と考えられる。

## 3. 本研究に課された今後の課題

人は、多次元に生きる人間として複数の役割を担っている。したがって、人は、時間的・空間的に「家族・親族」、「仕事」、「地域」、「友人」の四つの場において役割を移行させながら遂行しているのである。たとえば、ある人は、家庭人から仕事人へ、仕事人から地域の人へとそれぞれの役割を遂行する。しかも、その移行の度に心境の変化や意識の移行も伴いながらあらゆる役割を果たしている。

本稿は、「プロダクティブ・エイジング」を可能にするための「個のボランティアリズム」を形成する方策として、

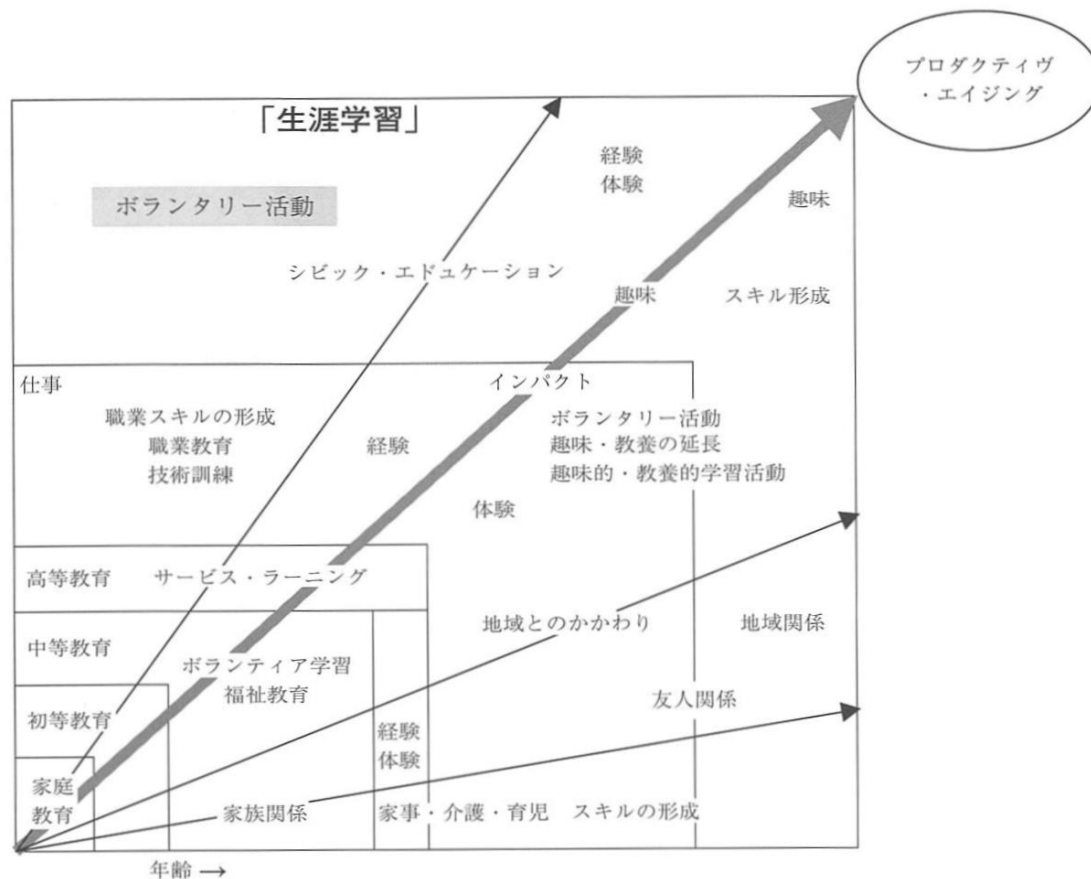


図5 「プロダクティブ・エイジング」をめざす教育・学習の体系

「教育」「学習」の様々な展開を述べ、本研究の終わりに、「プロダクティブ・エイジング」への方向をもつボランティア学習、福祉教育、コミュニティ・プログラム等の開発が重要であることを再確認した。今後、多様な人生経験や社会的エネルギーをもつ、高齢者層が自らエンパワーする多様な教育的試みがさらに、期待されることになるであろう。

しかし、著者の研究課題として残されたのは次の3点である。

第1に、「プロダクティブ・エイジング」の可能性を高める総合的な学習教材のプログラム開発であり、それを、生涯学習体系の中に位置づけることである。さらにその実践の場に身をおいて検証し、改善することである。第2に、プロダクティブ・アクティビティを高揚させるサービスラーニング研究及びシビック・エデュケーション研究に取り組むことである。第3に、いかなる心身の状況になっても「プロダクティブ・エイジング」の可能性を追求できるような多様な支援メニューの用意がいかにしたら可能かを追求することである。

今後は、上記課題を、本学学術フロンティア推進事業に

おけるテーマ「生涯学習の観点に立った『少子・高齢社会の活性化』に関する総合的な研究」に連動させ、本研究をさらに発展させていきたい。

#### 注

- 1) 各々の定年の迎え方を時間軸で区切るならば、次の三つのタイプに分類することができる。第1に、早期退職優遇制度に応じて退職したケース、第2に、規定された定年年齢に応じて退職したケース、第3に、勤務延長制度、再雇用制度、転職意向、転職援助あっせんなどに応じて退職したケースである
- 2) Osborne(1996:7)は、VanTil(1988)のボランティア概念の類型を発展させて、三つの要素をより明確にしたボランティア類型を示した。Osborneのボランティア概念の3類型とは、すなわち、社会における組織の原理としてのボランティア行為の概念化「ボランタリイズム(Voluntaryism)」、個人「ボランタリアリズム(Volunteerism)」、組織「ボランタリズム(Voluntarism)」である。Osborneによれば、個人の「ボランタリアリズム」とは、VanTilの二つの中核の原理、「強制されない個人」と「有益とみなされる」を併せ持った個人の行為をいう。
- 3) 個人における自発性の触発をもっとも鮮明に表現し、自発的参加を触発する諸条件に関して、豊かな示唆を与えてくれそうな対象者を選定した、この場合、調査対象者が個人

のライフヒストリーを語りやすさを重視した。これは、個人の価値観や考え方、生活と活動の経験からしか見出すことができないものである。

- 4) 筆者が移動範囲可能な、ボランティア活動のサポート機関(15組織)、シニアに関する関連組織(9組織)に可能な限り、その相談窓口や事務局に直接足を運んだ。
- 5) この結果は、1991年、1996年、2001年の3回にわたり「サラリーマンの生活と生きがいに関する調査」を実施してきたシニアプラン開発機構の調査結果と一致するこの点に関して、前田(2003:24)は、定年のタイミングは時代とともに遅くなっている。これは60歳定年制の浸透と連動している。企業が55歳から60歳に定年年齢を引き上げ、多くの労働者は60歳以降に定年を経験する割合が増えたものと推測している。
- 6) 20人の選定の条件は、①なるべく多様な種類や特徴のあるボランティア活動で近似した事例はないこと、②プロダクティブ・アクティビティへの誘因を抽出できるような事例であること、である。

#### 【引用文献】

Bass, S. A., Caro, F. G. Product Aging: A Conceptual Framework,

*Productive Aging: Concepts and Challenges*, Johns Hopkins University Press Greenwood Pub Group, 2001, pp. 37-78.

Glaser, B., Strauss, A. *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*. Aldine Publishing, 1967(=後藤隆・大出春江・水野節夫訳『データ対話型理論の発見：調査からいかに理論をうみだすか』新曜社, 1996.)

前田信彦(2003)「高齢期における多様な働き方とアンペイドワークへの評価：男性定年退職者の分析」、『国立女性教育会館研究紀要』7, pp. 21-31.

Osborne, S. P. ed.(1996) *Managing in the Voluntary and Non-Profit Sector*, International Thomson Business Press.(=1999, ニノミヤ監訳『NPOマネージメント』中央法規.)

Padgett, D. K. *Qualitative Methods in Social Work Research: Challenges and Rewards*, Sage Publications, 1998年

齊藤ゆか「日本における『プロダクティブ・エイジング』の可能性」、『昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要』12, 2004a, pp. 59-71.

齊藤ゆか『ボランティア活動とプロダクティブ・エイジングに関する研究』昭和女子大学博士論文, 2004b

総務省『社会生活基本調査報告2001(平成13)年』(財)日本統計協会, 2003.

VanTil, J.(1988) *Mapping The third Sector: Voluntarism in a Changing Social Economy*, The Foundation Center.